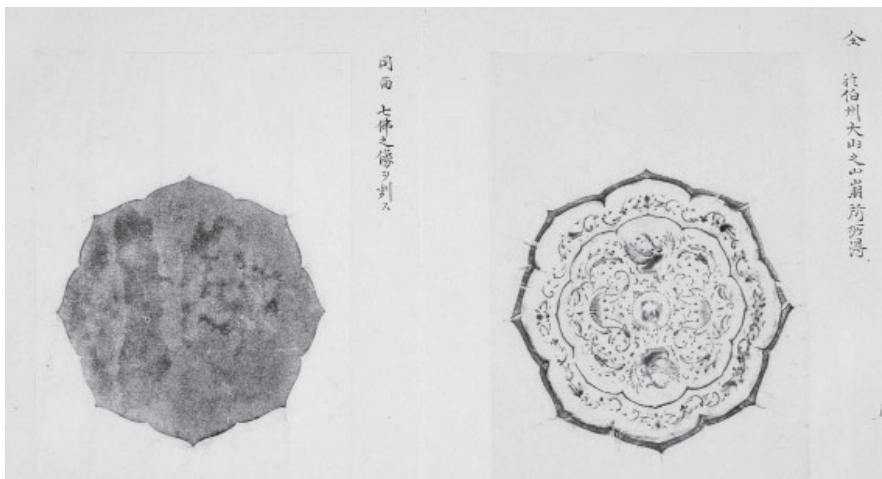


国立歴史民俗博物館の愉悦⑬

『聆涛閣集古帖』

江戸時代後期（18世紀後半～19世紀後半）



『聆涛閣集古帖』鏡帖。この鏡の現物はかつては吉田家が所蔵していたが、現在は公益財団法人泉屋博古館が所蔵し、「線刻釈迦三尊等鏡像」の名で国宝に指定されている。

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が所蔵する『聆涛閣集古帖』は、江戸時代後期の古器物図譜集である。江戸時代後期には、各地に残る、いまでいう「文化財」を、模写や拓本などの手法でできるだけ正確に写しとる古器物図譜がさかんに作られた。写真のない時代ならではの産物といえる。

『聆涛閣集古帖』は、江戸時代後期に活躍した摂津国菟原郡住吉村（現在の神戸市東灘区住吉）の豪商・吉田道可（一七三四～一八〇二）を筆頭とする吉田家三代により編纂された。酒造業や廻船業の実業で蓄えた豊かな財力を背景に、当時の学者や公家たちとの交流を通じて作られたこの図録は、考古資料、古文書、美術

工芸品など、あらゆるジャンルに及ぶ。その中には自らのコレクションも含まれる。ちなみに吉田家の所蔵品を取めた「聆涛閣」の名称は、「波の音の聞こえる書庫」という意味で、実際にこの書庫は神戸の灘の海岸近くに存在していた。

にもものぼる。写された対象は、人間の過去の痕跡、すなわち歴史に関する広い領域に及ぶ。つまりこれは、近代の博物館が成立する以前の、「いにしえに対するまなざし」を知ることのできる貴重な資料といえるのである。

江戸時代後期には、「好古家」と呼ばれる人たちがいた。文字通り「いにしえを好む」という意味だが、彼らは各地に残る古い資料を調査し、その存在と魅力を伝えてきた。その意味で、文化財を伝えた先駆者たちといえるかもしれない。

有名な人物としては、『好古小録』『好古日録』などを著した藤貞幹（一七三二～一七九七）がいる。彼が作った『集古図』は、『聆涛閣集古帖』にも大きな影響を与えた。また「寛政の改革」で有名な松平定信（一七五九～一八二九）も、引退後は各地に残る文化財を調査し、その成果を『集古十種』という膨大な版本にまとめた。その編纂にあたって、「聆涛閣」の主人である吉田道可が惜しめない協力をしたことが、最近の研究で明らかになった。好古家たちは、ネットワークを形成し、各地に残る文化財の情報を共有していたのである。

『聆涛閣集古帖』を伝えた神戸の吉田家については、これまでその実像が明らかにされてこなかった。しかし最近の研究で、「好古」に目覚めた吉田道可の多彩な学芸活動の実態が明らかになり、同時代の好古家の間でもかなり著名な人物であったこともわかってきた。「北海道の名付け親」として知られる松浦武四郎（一八一八～一八八八）も、好古家の一面をもつが、彼は神戸の吉田家のコレクションを見るために、吉田家を二度訪問している。

『聆涛閣集古帖』に描かれた情報量の多さには、圧倒されるばかりである。その中には現在国宝や重要文化財に指定されているものもある。この豊かな世界の一端は、二〇二三年三月七日～五月七日まで、歴博の企画展示「いにしえが、好きっ！——近世好古図録の文化誌——」で公開される。また、『聆涛閣集古帖』の全面像は、歴博の総合資料学基盤システム khirin (https://khirin.a-rekhakuac.jp/database/reitokakushukochu) で閲覧する事ができる。（国立歴史民俗博物館 研究部教授 三上喜孝）